



日韓合同授業研究会会報

# 第79号

2012年1月29日発行

## 日韓合同授業研究会第18回交流会

### 奈良・飛鳥大会を迎えるにあたって

#### — 私たちは何故古代史を見つめるのか！ — (試論)

日韓合同授業研究会 善元

#### 日本人の源流を求めて

大学で外国人教育論を担当している。「日本人はどこから来たのか？」と聞いてみた。学生たちは縄文文化と弥生文化を知っている。そこで弥生人、縄文人を想定する。そこで文化の違いが人種の違いに繋がる。そう考えたのは昔のこと。現在、日本人のルーツをたどる検証方法は二つある。1つは従来の伝統的な考古学的の発掘・文献の成果から読み解く方法。人骨の形などで現在も有力な方法である。

しかしもう1つ、近年著しく発展した分子社会学がある。これは分子生物学の延長にあり、実に目覚ましい進歩がある。実はその謎を解く鍵は現代人の中にあるのだ。ヒトのDNAから日本人のルーツを読み解こうとするものである。篠田 謙一（国立科学博物館 人類研究部）によると日本人は16に分類できるという。もしこの分析法が正しいとするならば現代日本人は16通りのヒトがいることになる。これは日本人のルーツを知る方法としてはコペルニクス的な大発見である。では16の「日本人」はいつ、どのようにして日本に来たのだろうか？

日本人のルーツを「地球史」的にいえばこうなる。地球の氷河時代、シベリアにいたヒトたちはマンモスなどの食料を求めて南下し日本まで来た。4万年ぐらい前のことであろうか。さらにその後、温暖化により氷河が溶け

#### 目次

1. 私たちは何故古代史を見つめるのか (試論) . . . 1
2. 古代日本と朝鮮の関係をどうとらえるのか . . . 5
3. 田中史生著「越境の古代史—倭と日本をめぐる  
アジアネットワーク」を読む . . . . . 8
4. 第18回交流会奈良・飛鳥大会下見 . . . . . 9

始め、赤道付近の大陸が海に沈んだ。現在のフィリピンは、もともとは大きな陸地だった。その人たちは海水の上昇により避難し、その一部は日本までやってきた。大雑把に言えばその2つの系列が縄文人で2万年ぐらいの時代を築いた。縄文文化は豊かな文化を持っていた。それは青森県の三内丸山の大型遺跡が物語っている。また縄文時代に一部の地域ではすでに米づくりが見られた。米は弥生時代の前から日本には存在した。その後時代を経て弥生人がやってきた。せいぜい3000年ぐらい前のことであろう。つまり日本には、はじめに多様な縄文人が南方、北方から渡来し、その後歴史的に見ればつい最近、西方のアジア大陸から中国、朝鮮人がやってきたのだ。日本列島に来る時期や地域により「日本人」は冒頭に触れたように16通りのDNAに分かれるのだ！

### 奈良・飛鳥大会で私たちはなにを見つめようとしているのか

ではなぜ私たちは奈良・飛鳥大会を選んだのか。この時代は日本の基層文化である「広範囲な縄文文化」の上に、新たに弥生文化が花開いた時期であった。この地には縄文人が長い間、時をかけて築いた文化がある。縄文の時代、この地に住む人々は、緑豊かなこの地に存在し、全ての自然は崇拝の対象であり人々は自然を神として畏れ、あがめてきた。風、森、火、山、海など全てに神が存在する。祖先の霊も神としてあがめられた。そうした縄文人の住んでいた奈良に弥生人の集団がやってきた、西方の人たちである。彼らはこの地に合理的な行政機構をもたらし、最先端の文化（仏教文化）で自らの正当性を保とうとした。その過程ではすでに土着の弥生人さえも圧迫し国家づくりを始めた。日本最古の寺、飛鳥寺には金ぴかの仏像がある。初めてみる仏教芸術の極致で、民衆はこれを見て多に畏れひれ伏したのかもしれない。そこには自然には全く存在しない人工の大仏があるのである。

人が来て新しい文化を築く。おそらく日本の歴史の創成期には言語も単一でなく多様であったに違いない。では誰が奈良の都を築いたのか。そのなぞを解く鍵が法隆寺にある。聖徳太子である。この試論は、「日本人は、天孫降臨でも土から生まれ出たのでもない。DNAレベルで言えば、時期を経て16の異なる人々が日本列島に来て文化を築いた」ということを基本にしたい。そう考えた時、聖徳太子はなにものなのか、彼はなにをしたのだろうか？そのことについて2つのことを備忘録として記しておく。

- 1) 韓国の言語学者の長老、金容雲は2009年、ものすごい本を書いた。その著書「日本語の正体—倭人（ヤマト）の大王は百済語で話す—」（三五館）はとてつもない内容の本である。無文字社会の日本人がはじめて出会い、今でも使用されている文字、それは中国の文字・漢字である。さらに言えば、朝鮮半島を経由して日本にもたらした人は中国系の朝鮮人「王仁」といわれている。文献は全て中国語であり、日本に来て王になった人は朝鮮語（百済語）を話していたというのだ！！
- 2) 2001年本木雅弘主演のNHKドラマ「聖徳太子」でドラマの中では朝廷内では役人は皆百済語（朝鮮語）を話すという設定であったという。このことは「当時の渡来人」が政治や文化の重要な部分を担っていたことがわかる。古代日本の朝廷には古代朝鮮の影響が強く見られる。聖徳太子は8人の人の話を同時に聞き取ったという伝説がある。聖徳太子の出自に多くの諸説が残っている。  
聖徳太子の出自の諸説は別として、聖徳太子はなにをした人であろうか？592年、推古天皇が蘇我氏の本拠地、飛鳥で即位した。推古天皇は甥の聖徳太子を摂政とし、蘇我氏と共同して国政に当たった。聖徳太子は、603年に冠位十二階の制をつくり豪族に位

階をあたえた。彼らを朝廷の官僚にした。翌 604 年、聖徳太子は儒教・仏教・神道の思想を盛り込んだ憲法十七条を定めた。

聖徳太子は日本で中国の儒教精神「徳・仁・礼・信・義・智」から「冠位十二階」を制定した。また国の方針「憲法十七条」を制定したといわれている。

「一に曰く、和を以って貴しと為し、忤（さから）ふること無きを宗とせよ。

二に曰く、篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とす。臣をば則ち地とす。

十二に曰く、国司、国造、百姓に斂（おさめ）とることなかれ。

十七に曰く、それ事は独り断むべからず、必ず衆と与に論ふべし。」



ここには仏教を国家宗教としつつも「和の精神」を提唱した。つまり聖徳太子は権力争いを見てきて、時には戦いに組した。そこにはさまざまな戦いの軸があった。縄文以来受け継がれていた土着の「八百万の神」の存在である神を奉る人、新たな仏教文化で改革をしようとする人、聖徳太子はすでに存在している土着の弥生の文化、あるいは縄文の文化を統合しようとしたことが、最大の功績ではないだろうか。それを政治の形にした人である。

「和を以って貴しと為し」または儒教精神「徳・仁・礼・信・義・智」など争いを終わりにした人である。

しかしその後の日本の歴史は、「記・紀・万葉」を作り、統治者である「天皇の統治の正当性」の歴史に書き換えていった。言うまでもないが、それが日本の超国家神道の道、第 2 次世界大戦にまでつながり、現在問題となっている中学校の教科書問題につながって行った。

金容雲の研究に少し触れておきたい。金先生は数学者でありながら、古代の日本語・韓国語についても精通しているだけでなく、三国時代のそれぞれの国の言語、さらにはアイヌの言葉、北東アジア・イルクーツク・ギリヤークの言語にも明るい。「三国時代」は世界的に見れば実に多くの民族が入り交ざっている。ツングースなど北方系の高句麗、インドのドラビダ系の新羅、さらに百済ではスキタイの鉄文化の影響が残るといふ。私たちは朝鮮半島からの影響も東アジア史の中で検証していくことが必要である。私は金先生にお会いした時、韓国にはアイヌの言葉がかなり広範囲に残されていると聞き驚いたことがある。この時代、東アジアは広範に人の行ききがあったのだ。そうした中で金容雲は「日本語」と「韓国語」のルーツが「百済語」にあることを明らかにした。その後韓国では新羅が国を統一するが、中国語の影響を受け音韻変化が進んだということもじつに示唆的な見解である。

### 歴史とは「現代との対話」東アジア史のダイナミズムの中で古代史を考える！

私が言いたいのはこうである。日本人のよさを言うならば「日本は歴史を築くとき二つの文化が入り混じった文化であった。」ということである。つまり歴史を大きく見れば日本人は弥生人と縄文人がお互いに覇を争い、征服しつくすのではなく融合したということである。

宗教を一例に見てもそのことがいえる。日本人の初めの宗教は仏教ではない。自分たちの周りにある全てのものに神が宿っていた。八百万の神である。日本にあとから来た人たち、弥生人は文化、技術を日本にもたらした。そして民を支配するために仏教を導入するのであ

る。私たちが今回、飛鳥文化を中心にフィールドワークをする。時の権力を持ち民衆を支配する王（天皇）は土着の神を仏教で支配しようとした。おそらく壮絶な権力抗争があった。それをまとめようとしたのが聖徳太子といわれている。「和をもって尊しと為す」とはまさに仏教と日本の八百万の神との和を求めたのであろう。もちろん時の権力は八百万の神の神通力を天皇が吸い取ることも忘れなかった。天皇が行幸するとき必ずその土地を題材として詠んだのはその土地の神を自らの中に取り込んでしまう儀式であったのだ。

私はよく学生たちに半ばジョークでいう。「日本人は土からうまれてきたのではない。ましては天から降りてきたのでもない。ほかの陸地からやってきたのだよ」多様な人が日本で出会い日本文化の基礎を作った。その中に朝鮮系日本人が大きな役割を果たした。かつて私が墨田区の教員をしていたとき、子どもたちが浅草の浅草寺を調べに行ったことがある。浅草寺の縁起を調べようとしたのだ。もともとこの寺は神仏混合、関西から東の国にやってきたのが於美阿志神社の檜隈兄弟であるといわれている。浅草寺の重要な祭り、三社祭は檜隈兄弟と土師氏の3人を祭ったもので3人とも渡来系の人などである。インタビューで子どもたちが驚いたのは浅草寺で朝鮮と関係があるかと聞いたとき寺の説明員が烈火のごとく怒ったと驚いて話した。私に言わせれば浅草寺は誰が開祖でもいい。しかし問題は「朝鮮隠し」をすることである。この於美阿志神社は雄略天皇の時代に活躍する渡来系の檜隈民使博徳が出ている。呉の国に派遣され、織機技術を持った者たちを連れてきている。檜隈兄弟は檜隈を中心に居住した集団であり東の国、浅草に派遣されたのである。そこで「日本文化はみな朝鮮人が作った！」などと自慢する発想はすでに遠い昔のことなのだ。奈良も然り、ここには朝鮮からの渡来の人が多いのである。

### 奈良・飛鳥大会を迎えるにあたって

私たちは、国際化の時代を迎え私たちの民族的アイデンティティを新たに再生させなければならない。国内の多様性を意識することの意味を再生させなければならない。そこで奈良・飛鳥を検証するのである。私たちは今沖縄の韓国・朝鮮人の軍夫・慰安婦の調査をしている。昨年韓国の真相究明委員会で3000名を越える名簿を入手した。私たちはこの人たちの記憶を残すために、2年前から沖縄での聞き取りを続けている。

今年の2月、私たちは韓国まで出かけ軍夫の聞き取りを行おうとしている。そうした中、12月ソウルで、慰安婦碑のモニュメント作成展示に日本の外務省は外交圧力をかけ撤去を求めるといふ。夏、韓国の裁判所が慰安婦の戦後補償をしていないのは違法であるということから再び大きく問題にされ、今回の事件になった。直後に来日した韓国の李大統領はそのことに触れたが大きな進展はなかった。

奈良・飛鳥は私たちが本格的にチャレンジする古代東アジアの交流のあった場所である。私たちの視点が問われている。またこの地には神話の世界の天皇陵もある。古代史を単なるノスタルジーにしないために共に学び新たな交流の



深まりができる交流会にしたい。

## 古代日本と朝鮮の関係をどうとらえるか

### …「つくる会」中学歴史教科書の歴史観、大和政権像

遠藤

#### はじめに

本稿は「つくる会」中学歴史教科書<sup>1</sup>の古代史記述、特に日朝関係史について検討することを目的とする。

内容検討の前に、古代史記述においても2006年、安倍政権下、強引にねじまげられた「教育基本法に最も適った教科書」<sup>2</sup>という精神がつかぬかれていることをまずしるしておく。

そもそも戦後、日本の教科書における古代日朝関係史記述はどうであったか。

高句麗広開土王碑<sup>3</sup>碑文の解釈に典型的にみられるように、多分に戦前の皇国史観、日本中心史観に影響されてきた。この種のみかたは、いまなおさまざまなかたちでひきずっている。

戦前の日本における古代朝鮮観とは、古事記、日本書紀の神話のとおり「朝鮮は日本が支配していた地」であり、「日本が上、朝鮮が下」の関係であった。これらのことは戦前の国史教科書に記述されていたばかりではなく、戦前の歴史学もこのことを「検証」する方向で研究がおこなわれていた。

戦後、これらへの反省から、旗田巍『日本人の朝鮮観』（勁草書房、1969）があらわされ、井上秀雄、武田幸男、浜田耕策、田中俊明、鄭早苗、李成市らが研究をすすめてきた。また、日本での研究におおきな刺激と影響をおよぼしたのが、金錫亨「三韓三国の日本列島内分国について」（翻訳は『古代日本と朝鮮の基本問題』（学生社、1974）所収）、『古代朝日関係史』（翻訳は勁草書房、1969）等や韓国の研究者による研究であり、1972年の高松塚古墳壁画等の発見であった。井上秀雄ほか『セミナー日本と朝鮮の歴史』（東出版、1972）、朝鮮史研究会『朝鮮の歴史新版』（三省堂、1995）、『入門朝鮮の歴史』（三省堂、1986）等はこれらの研究進展を受けとめ、歪められた古代史像をただし、歴史教育に反映させようとした成果である。

#### 1 歴史観…「歴史を学ぶとは」について

6頁冒頭、「先祖が生きた歴史」という小見出しでつぎのような記述がある。

歴史を学ぶとは、過去のできごとを知ることだと考えている人が多いかもしれないが、これは必ずしも正しくない。歴史を学ぶのは、過去におこったことの中で、過去の人がどう考え、どう悩み、問題をどう乗り越えてきたのか、つまり過去の人とはどんな風に生きてきたのかを学ぶことだ、といったほうがよい。

これから学ぶ歴史は、日本の歴史である。これはいいかえれば、みなさんと血のつながった

<sup>1</sup> 育鵬社版は2012年4月14日から市販される。ここでは『中学社会[改訂版]新しい歴史教科書』（扶桑社、2011）をもとに検討していく。育鵬社版はおおむね扶桑社版を継承したものである。

<sup>2</sup> 育鵬社ホームページより。

<sup>3</sup> 戦前、白鳥庫吉による本碑の日本への搬出計画があったことをあわせしるしておく。もしこの計画が実行に移されていたならば、すでに韓国をへて北朝鮮に返された「北関大捷碑」同様、または現在の文化財返還問題以上に大問題になっていたであろうとおもわれる。

先祖の歴史を学ぶということである。あなたの最も身近な先祖は、あなたのご両親だ。両親の先には、4人の祖父母がいる。こうして世代をさかのぼるにつれ、あなたの先祖の数は増え続ける。この日本列島に住んでいた人たちは、現在教室で机を並べているあなた方の祖先であるということもわかる。日本の歴史は、どの時代を切っても、すべて私たちの共通の先祖が生きた歴史なのだ。

この記述に対し、3点問題をあげておく。

第1に、歴史を学ぶ意味を、「過去のできごとを知ることだと考えている人が多い」と批判しながら、「過去の人とはどんな風に生きてきたのかを学ぶことだ」としている。ここには「歴史を学ぶ」視点はあるが、「歴史に学ぶ」視点がない。さらに、過去のおやまりをただす方向で考えるのではなく、「どう悩み、問題をどう乗り越えてきたのか」とオブラートでつつんでいる。

第2に、「先祖」、「祖先」、「血のつながり」を過度に強調している点である。私の担当する生徒の中には、中国、フィリピン、タイ、ベトナム、韓国、南米等から保護者とともやってきた生徒がたくさんいる。なぜ日本の歴史を「血のつながった先祖の歴史」と規定してしまうのか。日本以外の国々からやってきた人々の歴史が目にはいつているのだろうか。除外されてはいないか。

第3に、第2にあげたことと関連して、歴史が展開する舞台をなぜ日本列島に限定するのか。約1万年以上前は大陸と地続きであり、人々の往来もあった。また、古代、朝鮮半島との交流はさかんだった。なぜ日本史をあえて「日本列島を舞台にした日本人の歴史」という狭義に定義してしまうのか。

以上のような前提に立ち、「欧米列強諸国の力が東アジアをのみこもうとした近代にあっては、日本は自国の伝統を生かして西欧文明との調和の道を探り出し、近代国家の建設と独立の維持に努力した。しかし、それは諸外国との緊張と摩擦をとまなうきびしい歴史でもあった。私たちの先祖の、こうしたたゆまぬ努力の上に、世界で最も安全で豊かな今日の日本がある」と記述している。

本稿は、近代史記述批判の場ではないが、「諸外国との緊張と摩擦をとまなうきびしい歴史でもあった」という記述からは、朝鮮、中国、アジア侵略に対する反省はみられない。「きびしい歴史」をのりこえ、「世界で最も安全で豊かな今日の日本がある」という記述はあまりにもひとりよがりではないか。

このようなひとりよがり、おもいががった感情的な記述は近代史にかぎらず随所にみうけられる。各時代の記述をつらぬく思想であるといえる。歴史とは、ロマンに満ちた英雄物語ではない。このような自己陶醉表現を中学生に提示することは、ふさわしいことなのだろうか。

## 2 弥生文化、倭、大和政権をどうみるか

…「稲作の広まりと弥生文化」、「大和朝廷と古墳の広まり」について

まず、24頁の記述を提示する。

すでに日本列島には、縄文時代に大陸からイネがもたらされ、畑や自然の水たまりを用いて小規模な栽培が行われていたが、紀元前4世紀ごろまでには、灌漑用の水路をとまなう水田を用いた稲作の技術が九州北部に伝わった。稲作は西日本一帯にもゆっくと広がり、海づたいに東北地方にまで達した。

稲作が自然に伝わったような表現である。左下には小さな地図がそえられているものの、なぜ稲作技術を有した人々が朝鮮半島から渡来した、と明確に記述しないのか。渡来人がいたからこ

そ、技術も伝わったという視点が欠落した記述である。

つぎに 28 頁小見出し「大和朝廷による国内統一」の記述を提示する。

中国の歴史書で「倭国」とよばれていた日本は、4 世紀のころ、中国の文字記録からまったく姿を消してしまう。この期間、中国では国内が分裂して、対外的な影響力が弱まっていた。

ちょうどその時期、朝鮮半島では、北部で高句麗が強国となり、南部では百済や新羅が台頭して、統一国家への動きが強まった。こうした周辺諸国の動きに合わせるかのように、日本列島でも、小国をあわせて統一国家をつくる動きが生まれた。その動きの中心は、大和(奈良県)を勢力の基盤にした大和朝廷とよばれる政権だった。

大和朝廷の始まりについては、同時代の文字による記録はない。しかし、大和朝廷が強大な政権になった時期が、4 世紀前半のころであることは、次に述べる古墳の普及のようすから推測することができる。

(中略)

古墳にほうむられていたのは大和朝廷の指導者で、のちに一定の地域に勢力をもつ豪族たちもほうむられるようになった。大和や河内(大阪府)には、ひときわ巨大な古墳が多数つくられている。これは、大和朝廷がこの地域の有力な豪族たちが連合してつくった統一政権だったことを示している。古墳は、近畿地方からしだいに、南は鹿児島県から北は岩手県にわたる国内各地へと広まっていった。これは大和朝廷の勢力の広がりを反映したものと考えられる。

歴史用語の問題をあげる。現在市販されている中高の教科書でいまだに「大和朝廷」という用語を使っているものは珍しい。ちなみに『新編新しい社会歴史』(東京書籍、2011)、『新選日本史 B』(東京書籍、2011)では「大和政権」、『詳説日本史 B』(山川出版社、2011)では「ヤマト政権」を使用している。

私たちは古代史を近現代史の観点、近代国民国家、統一国家をモデルとした観点<sup>4</sup>からついみがちであるが、そのような観点から古代国家をとらえることはできない。

上記の記述からは「大和朝廷」が、朝鮮三国と歩調をあわせて「統一国家」をつくろうとしていたかのようにもよみとれる。さらにその統一国家は相当広範囲だった、換言すると、各地を統一した強力な国家だった、といわんばかりである。

これについて『新編新しい社会歴史』は「大和政権は、王を中心に、近畿地方の有力な豪族によってつくられていました。大和政権の支配の広がりにもなって、前方後円墳などの古墳が、各地でも、その地の豪族をほうむるためにつくられるようになりました」(25 頁)、『新選日本史 B』は「日本列島でもこのころ、小国を統一する動きのすすんでいたことが古墳などから知られる」(20 頁)と若干ひかえめに記している。『詳説日本史 B』は「古墳はおそくとも 4 世紀の中ごろまでに東北地方中部にまで波及したが、これも東日本の広大な地域がヤマト政権に組み込まれたことを示している」(20 頁)と記している。

なぜ、統一国家成立を早い時期に設定するのか。

古代日本は朝鮮侵略できるほどの強い国家権力を有していた、と言いたいがためではないだろうか。つぎの「7 大和朝廷と東アジア」(32 頁)につなげ、朝鮮半島において覇権あらそいをしたというシナリオが展開する。次章の小見出しは「百済を助け高句麗と戦う」、「倭の五王による朝

---

<sup>4</sup>田中史生『越境の古代史』(筑摩書房、2009)はこのような観点や一国的な観点からではなく、日本、朝鮮、中国をまたぐ古代史像を提示している。

貢」、「新羅の台頭と任那の滅亡」、「帰化人<sup>5</sup>と仏教の伝来」で構成されている。  
はたしてどうなのか。ひきつづき検討したい。

田中史生著

「越境の古代史—倭と日本をめぐるアジアネットワーク」

(ちくま新書)を読む

川辺

今、私の机の周りには、(A)昭和14年発行の「尋常小学修身書巻五 児童用 文部省」、(B)昭和16年発行の「文学博士渡邊世祐著 新制 中学國史 上級用上巻 中等學校教科書株式会社」の2冊がある。これは兄たちが使った教科書で、2ヶ月程前蔵の中を整理したら出てきた。最近買い求めた2冊の教科書もある。(C)育鵬社の「新しい日本の歴史」(つくる会教科書)(市販本)と(D)東京書籍の「新編 新しい社会 歴史」である。

(A)「世界に国はたくさんありますが、我が大日本帝国のやうに萬世一系の天皇をいただき、皇室と臣民とが一体になっている国は他にありません。」

(B)「かくて歴代の天皇は神勅を奉じて国民に君臨し神武天皇が大和を平定して天業を恢復せられ、橿原の宮にはじめて即位の大礼挙げさせたまうてからすでに2600年の長い間、我国は揺らぐことなく国運は隆盛を加え、現在に及んでいる。」(注)

(C)「60年ぶりに改正された新教育基本法に基づく新学習指導要領による最初の中学校教科書である。光輝ある父祖の偉業を否定する自虐的歴史教科書と国家的意識を欠如した家族解体を推進する公民教科書に代わる、改正法に忠実に則した育鵬社教科書こそ国家再生の礎となろう」(推薦文 前拓大総長 小田村四朗)。

(D)は「なぜ歴史を学ぶのか」ということを考えたことがありますか」という問いかけがあり、日本の歴史を開かれた空間で理解していこうという方針がわかる。扉の見開きのページは、「世界のなかの日本『ジャポニズム』広重とゴッホ」として絵画で紹介している。



このような歴史と現在の状況のなかで、著者田中氏は「はじめに」で「神や神話が力を失った近代、王から主権を奪った国民は、その一定の範囲で括られた国民だけに許される主権を、神授説とは別の方法で正統化しなければならない。」と述べられ、「近代」の「国民史」の「正統化」の背景を説明されている。本の題名にあるように、越境＝国家の枠から抜け、人・モノ・文化が行き来し影響を与え合う古代東アジアの実相を多層的・多層的ネットワークとして描き出した。

私なりに歴史と現在の状況を整理してみると、近代という時代のなかで日本という国家は1910年から1945年まで隣国を丸ごと植民地化して日本の主権を拡大、主権のない国・民族に

<sup>5</sup> いまだに「帰化人」という歴史用語が使用されていることも特異である。

し、多くの悲惨を積み重ねてきた。そのことを「正当化」するために時代遅れの、「万世一系の天皇は支配する」という「皇国史観」を国民に強要し、独善的に相手を見下し・蔑視する歴史を書いてきた。1945年8月15日は、日本にとって、皇国史観に支えられた国策による戦争に敗れた記念日であり、主権を奪われ抵抗した民族にとっては「光復節」となった。そして、本年で66年の「戦後」が経過した。日本が敗北したのは欧米だけでなく、アジアの諸国民に敗れたのだが、続く「冷戦」という、社会主義に対抗するためという「正当化」により、敗戦の分析はまだまだ国民に共有されていない。

原爆投下にも、国際社会の中での「正当化」が生きている。核兵器を持つ国が増加、原子力発電という「こども」(?)が増え続け、今回の大惨事となった。冷戦の勝利者は格差を拡大、テロを誘引した。反テロ戦争に勝利するためという次の「正当化」で国家管理を強化し閉塞感を拡大してきた。こうした近代国家が暴走・「正当化」してきた誤魔化しを見抜き、止めさせ、歴史の真実、人間のしてきた本当の姿を見つけていきたい。

交流会の飛鳥開催をきっかけにして、近代国家の枠組み・意識から自由になり、古代東アジアの実相を共に学ぶことで、より自信をもって連帯し、今を生きていこうとしている私たちにぴったりの参考書であろう。

こんな研究を土台にした教科書で学べたらどんなに豊かな気持ちになれるだろう、というのが一番の感想である。あのような教科書と歴史観を与えられた戦前の子供達が本当に気の毒だ。授業さえ戦争で受けられなかった無念さを70代80代の方から聞くことがある。その後の66年間の、「正統化」「正当化」論への闘いも時代の課題と共にあり、一つ一つ事実の解明を積み重ねての現在の研究の成果をこの本は示していると言っていいだろう。序章の研究史は、わたしも生き学び・教師をしてきた時間でもあり感慨深く読ませていただいた。特に上原専祿氏については、東洋史を専攻する動機を与えてくれた方であり、高校時代に学んだアジアから始まる世界史教科書(検定で不合格となり、その後「日本国民の世界史」として市販された)は、今も本棚の隅にある。

この本では、古代東アジアの実相を多層的・多層的ネットワークとして描き出すことで、分かっているつもりの語句に魅力的な光をあてている。そうした語句を目次の代わりにあげ、飛鳥寺に見られる朝鮮半島と倭との深い交流例の指摘を紹介したい。

- \* 渡来人、帰化人、混血児、亡命者、往来者、海賊、海商
- \* 渡来系氏族とミヤケの王権ネットワーク
- \* 留学僧、留学官人(師弟関係による伝習)
- \* 寺、仏教、漢字、書物の役割
- \* 交易・外交の実相・官司先買制、高句麗使と黒い鳥の羽、太宰府、鴻臚館
- \* 新羅ネットワークと遣唐使と中国仏教教団・新羅坊、赤山法華院
- \* 三蔵法師玄奘と円仁「入唐求法巡礼行記」
- \* 北九州・備前・難波(淀川水系)・東国・陸奥・出羽の地域性
- \* 地域としての黄海と江南
- \* 百濟仏教と西域の僧・百濟の技能者にペルシャ系の人々が含まれている
- \* 天皇制と中華思想・アジアにおける中国の存在一中華思想と冊封体制
- \* 広州市舶司一宦官と唐物使一蔵人



- \* 9世紀後の江南の港、海賊と奄美大島、宴と喜界島  
新鮮な語句
- \* 文化的身体、政治的身体、越境的身体
- \* 蕃客、流来
- \* ドォヴァーラヴァティー王国

《日本最初の大伽藍・飛鳥寺》

- ・発願・蘇我馬子（渡来系）。蘇我氏の氏寺
- ・仏舎利、僧侶、技術者は百済王が提供
- ・木塔は百済の王興寺と同じ様式（地下式の心礎をもち舎利容器を納めている。装身具）
- ・心柱を建てる儀式に馬子は百済服を着た100人以上の従者を従えて入場、大盛況
- ・丈六の仏像制作に高句麗は黄金300両提供
- ・伽藍配置は高句麗様式
- ・運営は、高句麗僧・恵慈（のち聖徳太子と呼ばれる厩戸皇子の師）、百済僧・恵聡  
馬子の子・善徳の3人

発願から完成までの年月は588年から609年。この時代の国際的環境の中での飛鳥寺の建立なのである。年表風にまとめると、ユーラシア大陸全体が、新しい枠組みに向けて大変動期であることが分かる。

- |          |                                |
|----------|--------------------------------|
| 589年     | 中国、漢後の魏晋南北朝時代おわり、隋帝国成立。隋、高句麗遠征 |
| 618年     | 唐帝国成立                          |
| 226～651年 | ササン朝ペルシャ                       |
| 622年     | イスラーム成立                        |
| 645年     | 大化の改新                          |
| 663年     | 白村江の戦い                         |
| 660年     | 百済滅亡                           |
| 668年     | 高句麗滅亡                          |
| 676年     | 新羅、朝鮮半島統一                      |

飛鳥寺を「国際的な知的ネットワークにアクセスできる倭王権の国際教育文化センターだったのである。」「仏教ともかかわる幅広い専門知識・技能を教育する場として機能した」と位置づけ、また、古代東アジアの交流の魅力的な担い手たちも紹介している。恵慈、善信尼、観勒、王辰爾、恵日、帳保皐ら。鉄（朝鮮半島加耶）と米（倭）を交換しながら日本各地の首長が成長、さらに軍事的対立、文化の導入の過程で政治的統合が果たされていく。さらに、古代的統合の崩壊から、広い舞台で活躍する商人達の動きが海域世界とともに見えてくる。中世世界の幕開けである。

和田 萃「飛鳥一歴史と風土を歩くー」（岩波新書）、まだ私自身全部は読んでいないが（E）矢澤高太郎「天皇陵の謎」（文春新書）をあわせて読み、現地に立つことで日本とアジアの古代史、歴史のウソ・ホントについての理解が深まると思われる。近代国家日本の歪んだ歴史像への批判力をつけ、教科書の評価・採択についてしっかり関わっていくことが今、とても大切だと思う。

（注）「初代の神武天皇から第九代の開化天皇までの九人の天皇は、現在の歴史学、考古学では実在が完全に否定されている。だが、現実には豪壮な陵墓がその数だけ設けられている。幕末には徳川幕府が対朝廷政策の一環として新造、整備したものが、現代まで踏襲されているためである。だが、初代の神武天皇陵に限れば、すでに七世紀後半の壬申の乱の時には、現在の場所に築造されていたと見られる。」と（E）では述べている。明治・大正・昭和と整備がすすみ、畝傍山山麓の稜の南に広がる橿原神宮となった。その過程で、近接する被差別部落洞村の208戸が他の場所へ移転させられている、ことの記述も（E）にある。

# 2012年奈良・飛鳥交流会下見 記録

第18回交流会実行委員長 安藤

さる12月26日(月)・27日(火)の両日日韓授業研究会の波多野、川辺、善元、佐藤、ユン、藤田と私で今年夏の交流会会場地となる、奈良県飛鳥地方へ行ってきました。

振り返ってみると昨年の震災や原発事故発生の影響から、本年度の交流会を奈良に決定するまでの経緯(紆余曲折)がありました。結局2010年・11年の交流会を韓国で連続実施し、12年の交流会を日本で実施することに、しかも西日本でということで、奈良案が浮かびあがりました。今回の交流会会場地を切り口にどのように交流会を開催してゆくのか、このようなことも勘案するために、今回下見を行いました。

## 26日下見

26日(月)正午近鉄橿原神宮前駅に全員集合から下見はスタートするはずだったが、未明の東海地方の降雪で新幹線が遅れ、一部の方は遅れての合流となった。

ここからは奈良教組書記長の小川栄先生、同じく奈良教組松田暢裕先生の車に分乗させていただき、まずは橿原神宮へ向かう。ここは東京の明治神宮と同じく明治時代になって創建



されている、国家神道の威光を示すための象徴的場所である。私は以前この敷地内にある橿原考古学研究所の博物館を訪ねたが、神宮ははじめてだった。小川先生や松田先生のお話では、ここはもともと本当に小さな宮があるだけだったが、神社創建のためにここにあった町がそっくり移されたという。神社の杜も明治以降に作られたが、鹿島神宮の近くに居住、生活している私には、この神宮は随分(空が)明るいと感じた。古い樹木がうっそうと生い茂り、古来から人々の信仰を集めてきた神宮とは違うことがうかがえる。翌日訪問した大神(おおみわ)神社と比べても明解である。この近くには神武天皇陵とされる畝傍御陵がある。次にここに車で向かう。畝傍御陵も明治時代に大改装されたい。しかもこの墓より少し高い所にあった洞(ほら)村という被差別部落の人々もこのとき移転させられたという。小川先生は以前この近くの小学校に勤務されていて、その時児童がこの杜で迷い、管轄する宮内庁の職員にいたく怒られた話をされた。その2人の先生に案内され住居跡へ足をを進める。そして参道からいきなり細い山道を登る。途中水の流れをか細い板で渡る。この地に住んでいた人々は履物作りを営んでいて、随所に明らかに自然に植生したものと異なる樹木(シュロの木)があるのは、これを履物の材料(草履表)や船のロープの材料に使うためだと教えていただいた。あたりは先ほどの橿原神宮よりも古い樹木が生い茂っているが、よく見ると、空き地のような箇所が所々に見受けられる。ここに百数十年前に人の生活があったことを教

Pa

える痕跡なのだろうか。さらに進むといきなり前方にレンガ造りの小さなトンネル出口のような建造物が現れた。中には水がたまっている。ここに住んでいた人々の井戸の跡だと教えていただいた。

小川先生が一連の状況について近くの久保地区の資料館に資料が残っていると教えていただき、今度はその資料館に向かう。あいにく資料館は休館で、資料を見ることはできなかったが、地域の人々が被差別部落のことをきちんと記録に残そうとしていることに感動す



る。※1) もっといえば被差別部落や在日朝鮮人の人々を取り巻く問題に小川先生も松田先生も真剣に向き合っている姿勢が、案内をしていただいている話のはしばしから伝わってくる。私たち(川辺・佐藤・ユン・安藤)が乗せていただいた松田先生も小学校に勤務しながら、在日朝鮮人の子供たち、被差別部落の子供たちや、親たちとの交流の話がされた。現在奈良の朝鮮学校は休校状態で、子どもたちは大阪の学校へ高い通学費を払って通っていることも話された。私たちは、夏の交流で、古代史の視点を中心に進めたいと考えているが、橿原神宮にしても畝傍御陵にしても、権力者の歴史に覆い隠されそうな、弱者の立場を一生懸命掘返すこと。そして現代の問題を生きる私たちがそれをどう考えたらよ

いのか、そんな課題が明確になってきたように私には思えた。今お話をいただいている小川先生や松田先生から、奈良という地域の現代の息遣いやら、いろいろなものが見えてくるなあとと思った。まだ漠然としているが、なにかそれを知ることも奈良・飛鳥交流会の意義があるように思う。

この後私たちは、飛鳥寺に向かった。蘇我馬子が発願した日本最古の寺院である。今でこそ、寺の領域はかなり狭くなってしまったが、本尊の飛鳥大仏(釈迦如来坐像)※2)は渡来人系鞍作鳥(止利仏師)の手によるもので、古代の日韓交流を象徴する寺院である。よく見ると本尊の脇に、ハングルの経文らしき文がぎっしり書かれた掛け軸があった。扶余の修徳寺と姉妹寺院関係を結び、別の漢文の経文とともに飛鳥寺に寄贈されたものだという。大学卒業時に韓国を旅した時に、扶余でやはり日韓の寺院の交流があることを知ったが、それと関係するのだろうか？

飛鳥寺のあたりから雲行きが怪しくなり、日が差さなくなると急激に寒くなってきた。この後回った甘樫の丘、亀石、石舞台は雪も舞う天気になった。甘樫の丘の頂上は、飛鳥の地が一望できるところである。ただし今は寒いがきっと8月は・・・、石舞台にしても暑さの中でのFWになるだろう。

## 宿舎

本日の下見を終了し、交流会会場となる明日香村※3)の祝戸荘に到着した。自分で予約しておいてこういうのも何だが、思ったよりも綺麗な建物である。しかもコテージ風で2部屋が1軒の建物になり本館とつながっている。部屋も1部屋が広い。大人7~8人は宿泊できる広さである。全戸丘の中腹に、南向きに作られている。その前の風景は山里そのもの、夏はすごくいい環境になるはずだ。感無量、祝戸荘マンセー。現在45名で予約してあるが、それ以上ならば、貸切状態なので、ぜひ多くの参加者を募りたいと思った。夕食では小川・松田両先生も交えて本日の下見の反省会。小川先生には、交流会の舞台裏の諸準備のご協力について快諾いただいたこと。また松田先生は韓国語も話すことができ、韓国と奈良の教組の交流会でも、通訳をされていると聞き、来年の交流会にもお願いしたところ、いい返事

をいただいてほっとした。翌日はもう1人協力できる方もみつけていただき、大感謝。とにかく地元のご協力あっての交流会なので、まずは一安心。そして小川、松田両先生がお帰りになった後は、部屋で交流会やFW下見について、話し合い？を行って楽しいひと時を過ごした後、わたしはあえなく本日の営業終了。(おやすみなさい。)

最近では5時頃目が覚めてしまう。翌日もそうであった。朝風呂開始時間を待って、ホッとした。風呂もきれいで快適だ。宿泊地に問題はない。風呂上がり、本館2階の研修室ものぞく。100人以上入れる大部屋で、PCを接続して発表できる。言うことなし。朝食後、会計担当の佐藤さんと宿の人との、確認交渉を行う。当初考えていたより結構融通がきく。ただしレセプションと会議中の飲食物は、持ち込みしなければならないので、これは後で相談の要がある。8時半には本日もまたお世話になる、再び小川・松田両先生がおいでになったが、この打ち合わせが長引いてしまい、宿を出発したのが9時を過ぎてしまった。

## 27 日下見

本日はまず、高松塚古墳と壁画資料館に向かう。高松塚古墳といえば大学時代からお世話になっている李進熙先生の言葉を思い出す。ここは誰が埋葬されていたかよりも、どのような状態で埋葬されていたが大切だ。壁画の4神図は中国や朝鮮半島との関係を強く物語るし、人物絵にしても中国の永泰公主墓や朝鮮半島の徳興里古墳の人物画像との対比を考えることが大切であると強調されていた。いまでこそ高松塚壁画について、関心が高まっているが、発掘当初は、だれの墓かが関心の的で、やっぱり古代天皇制の枠組みの中だけでしか考えようとしないう風潮があったことを李進熙先生がおっしゃっていたことも思い出す。李先生は、朝鮮通信使の先駆的研究で有名だが、常々本来の専門は考古学でこの高松塚で論文を書いたとおっしゃっていた。早くから日本と朝鮮半島の交流という視点から、この古墳に注目していたのだ。これも権力者の歴史に隠された歴史の真実を見極めようとしていたことなのだと改めて思う。



本日も天候はあまり良くない。曇天で寒く昨日のように粉雪が舞いそうである。こんな時に二日間車を運転していただいて、こちらをお願い通りに付き合っていたらいる奈良教組の先生方に感謝しつつ高松塚壁画館をあとに、私たちは桜井市にある聖林寺(しょうりんじ)に向かう。奈良盆地の東南角の丘陵の中腹に建つ、この寺は奈良時代に創建され規模こそ小さいが、フェノロサがミロのヴィーナスと比較したという十一面観音菩薩(国宝)※4を安置し、なかなか趣のある寺である。そして本堂からは、奈良盆地の南側、飛鳥の地の眺望もよい。青空が少しずつ見え始めている。ここはFWでは見学予定地には入らないが、わざわざ立ち寄った甲斐はあった。

再び車で、大神(おおみわ)神社に向かうこの神社は三輪山(みわやま)自体が御神体である。大物主(おおものぬし)命が祭神とされているが、大物主とはそれ以前の大国主(おおくにぬし)命ということであり、出雲系のゆかりもあるようである。こここそ、神社という風格である。うっそうと高い木立に囲まれている、古来から、多くの人々の自然崇拝の象徴である。橿原神宮との差を考えるのには良いところであろう。この神社は蛇にまつわる伝

承がのこっているが、なぜか兎にも縁があるらしく。撫でるとご利益があるうさぎ像もあった。(ご利益、これも日本人の信仰の感覚だなと思う。)

さてお昼が近くなり、神社近くの「三輪そうめん」(冬だけ)にも気持ちがそそられるが、一行は再び車へ、発進してしばらくして、古墳時代前期、つまりもっとも早期に建造された箸墓(はしかは)古墳を車中から見る。近くには邪馬台国=近畿説を裏付けるとされる纏向(まきむく)遺跡もあるが、それより一行は「日本一タイ焼き」に目と体が向かう。こ



こから最終目的地法隆寺まで、一時間ほどは車中の人となる。途中、松田先生が、勤務された広陵町(こうりょうちょう)・三宅町(みやけちょう)※5を通過しながら在日や被差別地域の子供たちとの関わりをお話された。住井すゑの「橋のない川」のまさしく現代の状況だった。皮革製造がさかんで、野球のグローブの生産が盛んであったが、現在納入先の大手スポーツ用品メーカーが国内受注をやめてしまい、高い技術力があるためこのブランドで細々とプロ野球選手に卸していること。ということだった。昨日は

この町出身のプロ野球選手の話もされていた(彼も被差別部落出身ということである)。松田先生は、今日は写真や本をいろいろ用意していただいて、日頃の幅広い活動の様子がよくわかった。私は申し訳ないことに存じ上げなかったが、大阪を拠点に活躍される在日のミュージシャン・趙博(ちょうぼく)氏のことよく話をされた。CDをもらったので聞いてみようと思う。その松田先生は千葉出身であるにも関わらず大学以来、この奈良に生活していて、その話し方が生粋の奈良人?そのものという感じ、すっかり奈良に、関西に根を下して活動されている様子が伝わってくる。

最後の目的地法隆寺に到着する。十数年ぶりの訪問である。

見学の前に参道の土産物屋兼食堂で遅い昼食をとる。お腹もふくれて、法隆寺へ。

法隆寺は、どこを切り取っても古代の国際交流の跡がしのばれる寺院である。金堂では力強い印象の北魏様式※6で知られる釈迦三尊像(飛鳥大仏と同じ鞍作鳥作)に会える。周囲の回廊は、これまた有名なエンタシスの柱である。丸味がある長身な南梁様式※6の百済観音像、さらに隣の中宮寺に行けば、京都太秦の広隆寺とともに有名な半跏思惟像があり、韓国の新羅のそれとよく比定されている。6~7世紀には、当時の東アジアの交際関係の影響もあり、この飛鳥の地にはきらびやかな国際交流が行われていたに違いない。ここでまた李先生の言葉を思い出す。文化はそれ自体で流れてくるものではない。必ずそれを運ぶ人々がいることを忘れてはいけない。つまりこのような当時の先進文化をもたらした渡来人のことを忘れてはいけないのだ。

## まとめ

このようにして久々の修学旅行のような交流会下見も終わりました。小川先生、松田先生にはこの間、最後の最後までお世話になりっぱなしでした。また夏の交流会に際してもいろいろご協力いただけることとなり心強い限りです。沖縄大会もそうでしたが、同じ日本とい

っても置かれた状況は地域によって大きく異なり、そこに住む人々が、またその地域にある問題に向かっていることも、他の地域に住んでいると伝わってこないのではないかと思います。当会は日韓合同授業研究会という名称ですが、日本といっても多様な文化・人々が暮らしていることを再認識しなければならないと思います。

その視座で今回は、古い歴史を持ち同時に朝鮮半島や東アジアともつながりの深い奈良・飛鳥の歴史と現在の問題点を、奈良の人々、韓国の会員の皆さんと考えて行けたらと思います。

本当に有意義な下見となりました。

## <註>

※1 橿原市大久保地区は、洞村から移住させられた人々が多く住むところである。移住の際に、補償金をもらい新居を建てたが、かえてこのことが周囲からの差別意識を増長させてしまったということもお聞きした。

※2 飛鳥寺釈迦如来坐像は日本書紀によれば609年に完成した銅製丈六像であるが、その当時のものは、顔や右手の一部に残っている。(山川出版社 日本史B小事典)

※3 明日香村は道路拡張等の工事があちこちに見られるが、基本的に昔の集落を縫うように走る道が多く結構道が狭い。また高い建物はほとんどない。以前この村の厳しい景観保全と、建築規制の話聞いたことがあるがその賜物なのだろう。鎌倉市の状況に似ている(でも鎌倉はもっと俗物的——鎌倉市民の証言から)。同時にここに生活する人々にとって、この規制がどのように感じる事なのか。とも思う。

※4 聖林寺十一面観音菩薩像は1868年の神仏分離令で大神神社の神宮寺から移設させフェノロサや岡倉天心によって開扉された。(聖林寺略記)

※5 ここにある但馬(たじま)地区を被差別部落があり、皮革産業がかつて栄えたという。松田先生のお話では前日私が偶然利用した近鉄田原本(たわらもと)線に但馬駅があり、かつてここは皮革産業で働く多くの人々が利用してにぎわったという。現在は奈良盆地を走るローカル線だが、ここにも奈良の歴史が秘められている。ちなみに田原本町は住井すゑさんゆかりの地である。住井さん終焉の地は茨城県牛久沼のほとりにあり、没後時折市民に開放され、1度訪ねたことがあった。

※6 北魏、南梁とは中国・魏晋南北朝時代(3~6世紀)の王朝名。北魏は北朝を統一したが、この時期シルクロードを通じて仏教が広まっていった。南梁は正式には梁というが、南朝の漢民族の王朝で、やはり仏教が根を張り出した時期である。ただし、南梁様式もまた北朝の影響が強いという説もある。



日韓合同授業研究会 第18回交流会

## 奈良・飛鳥大会

日時：8月3日（金）～6日（月）

場所：祝戸荘

奈良県高市郡明日香村祝戸303 電話 0744-54-3551

詳細は次号でお知らせします。



## 短信

◎ 「私を生きる」という映画の中で国分寺エクスペリエンスというバンドの「世界のおかあさん」という歌が流れていました。子どもを生むお母さんは、おんなじ気持ちという歌です。北朝鮮のお母さんも、かの日の飛鳥のお母さんもおんなじ気持ちなのでしょう。

◎奈良・飛鳥大会の準備が始まっています。下見での嬉しい出会いが、私たちの期待を膨らませてくれています。奈良・飛鳥大会に、ぜひご参加ください。(F)

ウリ79号 2012年1月29日

### 日韓合同授業研究会

〒102-0074 東京都千代田区九段南3-9-11

マールコート麹町303

吉峯総合法律事務所内

事務局連絡先

E-mail [larrabee1991@yahoo.co.jp](mailto:larrabee1991@yahoo.co.jp)

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530